

日本史籍協会



限定四五〇部復刻

廣澤真臣日記

ひろさわさねおみ

マツノ書店

木戸・大久保の日記と並ぶ、維新史の第一級史料。維新成立時は長州藩を代表する「顔」でありながら、明治四年非業の死を遂げた巨人の全貌。

一昨日來脱隊之者徳地口に暴動折柄今十二字第四大隊着陣に直様追討及第一大隊駐附同断に大勝利尤夜に入候故先地方を占め明朝大掃攘之覺悟之段夜十二字報告有之

○四月八日 晴

一朝第九字藩廳出勤夕第四字歸寓

一今朝來於徳地口脱隊之者掃攘終る山代口へ僅遁去候段報告有之

一仲取方役人其外明朝出足東京罷登り幸便に付前件脱隊之者所置等大略

右大臣亞相公方の報知并長松少辨へ壹封前原兵部大輔山田同大丞正木

市太郎に連名壹封京都榎村權大參事へ壹封神戸内海大參事へ壹封等仕

出候事

一夕大參事中共外來話夜十一字分散

一大津四郎右衛門病中湯治旁當節郷里に罷歸居來翰之事

一脱隊之者爲追討丁卯九丙寅丸上ノ關邊航海既に及平定候得共其形行爲

廣澤真臣日記（明治三年四月）

三百十一



『広沢真臣日記』について

東行記念館副館長・学芸員 一坂太郎

いまや故郷山口県においてすら忘れ去られた感のある広沢真臣だが、維新当時は長州藩を代表する「顔」であった。薩摩藩で言えば、西郷隆盛や大久保利通に匹敵する人物と言つていいだろう。にもかかわらず、まとまった伝記としては、大正十年に村田峯次郎『参議広沢真臣卿略伝』という三十頁余りの小冊子が出版されているに過ぎない。

広沢は明治元年一月三日、長州藩から初めて新政府に参加として送り込まれ、翌二年七月に参議となる。ところが明治四年一月八日、三十九歳で東京で暗殺された。官僚として生きた広沢の生涯には、木戸孝允や高杉晋作のような派手な「武勇伝」は確かに乏しい。研究者の食指が動かなかったのも、案外そんな所に起因するのもかも知れない。

日本史籍協会から昭和六年に翻刻された維新前後の広沢の日記には、戊辰戦争を経ながら新政府が樹立し、近代国家を目指して歩み始めた日本の基盤が確立されてゆく過程が生々しく記録されている。木戸・大久保の日記と並ぶ維新史の第一級史料である。日記の自筆原本は、昭和二十六年（一九五二）、広沢家から他の文書類と共に国立国会図書館憲政資料室に譲渡され、今日に至っている。

日記の大半はいわゆる「府藩県三治制」時代の記録だ。新政府は明治元年閏四月二十一日、「地方ヲ分テ府藩県ト為シ府県ニ知事ヲ置キ藩ハ姑ク其旧ニ仍ル」と令した。これにより府県制を実施して知事・判事を置く他に、多くの大名による藩治を残すという矛盾を抱えることになる。こうした状況は、明治四年七月の廃藩置県により府県制が敷かれるまで続く。

このため政府の重鎮である広沢は、故郷山口藩の動向にも目を配らねばならなかった。たとえば明治二年から三年にかけて起こった諸隊の脱隊騒動に、東京の広沢たちがどう反応、対処したかも、日記からうかがうことが出来る、興味深い。あるいは面倒見の良い男だったようで、同郷人たちが連日のように広沢のもとを訪ねている様子も分かる。

このたびマツノ書店から復刻される『広沢真臣日記』は、初版にあった三百九十カ所の誤読、誤植を藤井貞文博士作成の正誤表をもとに訂正。さらに多くの図版も加え、決定版の名に相応しい内容になっている。遅れに遅れた広沢真臣の研究、評価は、ここからスタートしなければならぬだろう。

広沢真臣の人と業績

日本史籍協会 藤井貞文

広沢真臣は、姓は藤原氏、諱は直温、後に真臣まのおみと改む。幼名を季之進。金吾、又は藤右衛門と称し、更に兵助と改めた。号を障岳と言う。天保四年十二月二十九日に萩城下に生れた。同十五年十二月二十八日に同族波多野英蔵直忠の掣養子となり、その女の百合子と婚す。安政六年二月十九日に直忠が病気で隠居したので家督を襲いだ。

真臣は軀幹が長大で、性は温良、質直。最も文学及び槍術の技に長じた。嘉永六年六月



山口県萩市土原十日市筋の広沢兵助（真臣）誕生地碑



表紙(部分) 縦8.3×横17.7センチ



内容見本①の原文

この復刻版は、日本史籍協会昭和六年発行の『広沢真臣日記』を底本とし、東京大学出版会の昭和四十八年復刻版巻末にある「正誤表」に基づいて三百九十カ所に及ぶ本文修正を施したものです。

本書は入手可能な「広沢真臣関係史料」の

た。元治元年の秋、時勢が大いに転換し、為に真臣は藩獄に繋がれたが、翌慶応元年二月に謹慎を解かれ、同四月四日には藩の内命で広沢藤右衛門と改名した。因に廣沢姓は曾て波多野氏の祖が相模国秦野の地に住し、広沢郷を領したに依ると謂う。是より幕吏との接衝に与り、更に討幕の事に当り、終に討幕の勅書を拝戴して帰藩した。

慶応三年十二月、王政復古の号令が出づるや、藩命を以て上京し、翌明治元年正月には参与・徴士に任じ、翌二年四月には民部官副知事、七月には民部大輔となり、更に参議に任ぜられた。

翌三年九月十八日請願して永世広沢姓を称す。然るに同四年正月八日の夜半、三人の刺客が邸中に潜入して真臣を刺し、重傷を被る。療養遂に効なく、年三十九を以て薨じた。朝廷はその不幸を哀れみ、且つ多年の勲功を嘉みし、翌九日を以て正三位を贈り、金幣三千両を下賜せられた。而して官府はその兇賊を探索するも、容易に獲ず。朝廷は軫憂して、翌二月二十五日に詔を發し、之を嚴索せしめらる。

右大臣三条実美は大いに恐惶して「賊徒ヲ逃逸シ、既ニ五旬ニ及ビ、未タ捕獲ニ不至、恐懼之事ニ候」云々とて、嚴密に搜索し、速に之を捕獲して宸襟を安んじ奉るべしと訓令した。併しその賊は終に捕われず、その真相も杳として今日に至るも猶を明かではない。

芝愛宕下の青松寺に葬ったが、後に世田谷区若林の大夫山に改葬した。即ち吉田松陰の墓畔に在る。而して遺髪を山口市吾妻山に埋めて靈社を建てた。明治十二年十二月二十七日に朝廷は生前の勲勞を思食し、特旨を以てその子の金次郎を華族に列し、金壹万円を下賜し、同十七年七月には伯爵を授けた。大正十年二月二十四日には従二位を追贈、特に神道碑の下賜あり、之を墓畔に建てた。死して余榮ありと謂うべきであろう。

昭和六年十一月に我が史籍協会が公刊した『広沢真臣日記』は、文久三年四月七日より明治四年正月五日、即ち真臣が遭難する三日前に至る間のもので、主として国事に活躍した時期の日記である。

(本書 東京大学出版会 昭和四十八年復刻版「解題」より抜粋)

(表紙)
「第一」
丁卯十二月十八日より

備忘録

戊辰八月十四日まで

丁卯〇慶應三年

- 十二月十八日 夕御用有之急速上京被 仰付候段奉命之事
- 同月同夜 近々三條卿其外太宰府へ御歸洛之節三田尻御立寄有之其節 御同艦へ乗組罷登候様申事に付三田尻へ出浮
- 同月廿三日 三條卿其外三田尻御越著 兩君上御相對被爲濟同夜半薩州蒸氣春日丸へ乗組發船す
- 同月廿五日 巳ノ刻大坂著船薩邸へ揚陸に同藩大山彌助西郷信吾條 卿内森寺大和寺等一同公卿方へ御先へ上京に付同夜彼船乗船

廣澤真臣日記 (慶應三年十二月)

すべてを網羅した「決定版」です。今回の復刻に際し、次のような資料を付しました。

- ① 広沢真臣、生家跡、墓などの写真六點。
- ② 日記の表紙及び中味の写真十七點。
- ③ 大正十年刊、村田峯次郎著『参議広沢真臣 卿略伝』全文。
- ④ 国立国会図書館の作成になる広沢真臣宛書簡、広沢真臣書簡及び書類(意見書、履歴資料、長州藩関係書類)等の目録、及び広沢真臣略年譜。
- ⑤ 一坂太郎氏による「解説」。

■ 広沢真臣は地味な存在であった上、本人の書いた文字が非常に読みにくいこともあって活字化された史料は少なく、研究も進んでいないようです。今回の復刻が、広沢復権の契機となることを願ってやみません。

■ 本書は本文の大幅修正、関係史料の転載などに経費をかけた割には大サービス特価にしました。どうぞよろしくご吹聴下さい。

■ 体 裁 A5判六五〇頁 上製貼箱入

■ 定 価 一万三千元(税込・送料450円)

■ 特 価 一万円

■ 特価締切 平成十三年十二月三十一日

▼ 三点セット特価もあります。

▼ 直販につき書店卸不可。

▼ 分割・ボーナス払いに応じます。

限定四五〇部 (番号入)

徳山市銀座二の二三
電話 0854-23-3333
〒780-0803 徳島市三好区三好

マツノ書店